こころを つなぐ まちづくり

人権シリーズ vol.47

子どもたちの実態から

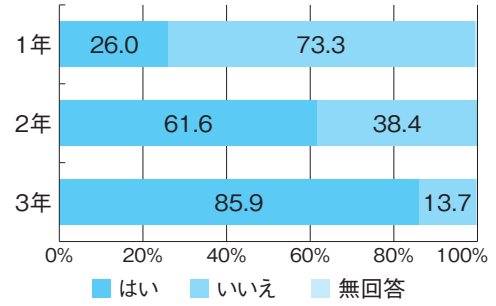
子どもたちは今、どのような思いで学校生活を送っているのでしょうか。私たちくにさき地区人権教育研究協議会（以下：くにさき地人研）では、「差別の現実から深く学び、生活を高め、未来を保障する教育を確立しよう」の研究テーマのもと、これまでの同和教育で大切にしてきたものを継承し、さらに人権教育が発展するよう実践に励んでいます。子どもたちを巡る状況が大きく変化していく中で、目の前にいる子どもたちの実態から出発し、一人ひとりの子どもの課題を把握し、解決に向けて努力しています。

昨年7月にくにさき地人研では、「人権に関する意識調査」を各小・中学校（小2～中3）で実施しました。これは、きつい思いをしている子どもたちの声に心を寄せ、背景にあるものを探り、原因解消に迫る実践をしていくことと、教職員自らが取り組みを振り返ったり、生き方を見つめ直したりすること、いわゆる「自己変革」を図っていくことをねらいとしたものです。調査内容は、(1)自分の人権に関するもの(2)周りの人権に関するもの(3)自分たちを大切に思う気持ちに関するもの(4)生き方に関するもの(5)部落差別に関するもの（中学生のみ）としました。

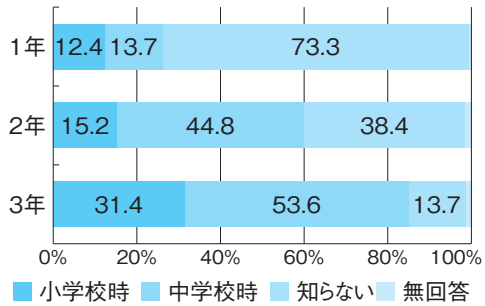
(1)・(4)については、どの学年も8割以上が肯定的にとらえています。(2)については、中1で肯定的な割合が低くなっています。これは、複数の小学校から入学してきたばかりで、変化に戸惑いなかなか良い人間関係が築けず、さびしい思いをしている友だちの姿に気づいていることが考えられます。小・中学校の縦のつながりや、同じ中学校に入る小学校同士の横のつながりの必要性を感じます。(3)については、小6で肯定的な割合が低くなっています。これは、自分の欠点を気にしたり、できないことや注意されることが多くなったりして、こうありたい自分になれていない自分自身を客観的に見ていることがうかがわれます。これも成長の一段階であるととらえられます。(5)については、「部落差別という言葉を知っていますか。」（表①）の問いに対して「知っている」と答えた割合が中1で2割だったものが、中3で8割を超えるように増えています。「いつ頃知りましたか。」（表②）の問いに対しては、中1で、小学校時に知った割合が1割であったものが中3になると3割に増えています。これは「部落差別」という言葉を小学校で直接扱わないとしても、中学校で学習を積むことにより、小学校での学習内容が思い起こされ、あのときのことがそうだったのかと結びつくからだと考えられます。ただ、中3で「知っている」の割合が8割止まりなことが気にかかります。これまでもいろいろな取り組みはしてきましたが、部落差別はなくなっていないということを強く認識して実践を重ねていかなければならないと思います。

今回の調査で全体的な傾向は見えても、一人ひとりの抱えている課題は様々です。目の前の子どもたちのサインを見過ごすことなく、一人ひとりの子どもと向き合い、良さを見つけ、存在感を認めていきたいと思っています。そして差別を許さず、手を取り合って立ち向かっていく子どもたちを育てていきたいと思っています。そのためにも、子ども同士をつないでいく取り組みを考えていきたいと思っています。

表① あなたは「部落差別」という言葉を知っていますか?（中学生）



表② いつごろ知りましたか?（中学生）



くにさき地区人権教育研究協議会
事務局　森　恵子